

亀岡フィールドステーション



Field Station KAMEOKA

亀岡フィールドステーションの活動概要

保津川（桂川）が貫くように流れる亀岡盆地。そこで育まれてきた歴史・文化は、保津川とともにあったといっても過言ではないだろう。亀岡盆地は、条里制水田の遺構が見つかるように古くから稲作の盛んな土地であり、水田を中心とした水田生態系と人々の暮らしは密接であった。また、保津川では、山や農地の生産物を運ぶ水運が盛んに行われ、川を中心にした流域の人々の暮らしが形成され、発展してきた。

原田早苗は、保津川（桂川）という自然の流れをうまく利用した流筏・舟運の歴史を振り返り、近世・近代・現代、筏・荷舟・遊船といった保津川の水運に関わってきた人々の対立・協調・調整といった関係性を読み解き、「したたか」に生きる人々の姿を探っている。今年度の研究として、近世の筏の歴史の分析を通じて、保津川の輸送ルートを支配したい山方（荷主）、独占的に保津川の筏収入を得ることができる保津・山本の筏問屋、急流を下る技術を有する筏士といった主体が、自分たちの利益を考え、対立・協調・調整を行う「したたか」な関係を見てきた。

河原林洋は、保津川の前筏士への聞き取り等を通じて流筏技術を研究し、筏組や筏流しのイベント等を通じて実践的な流筏文化の普及活動を行ってきた。また、南丹市八木町において「葉枯らし伐採」という伝統的な伐採方法、亀岡市京町では唯一となった鍛冶屋において筏組に使う金具「カン」の製造など流筏に関わる流域の文化を研究し、京都・嵯峨の車折神社の玉垣改築に代表されるように流筏で使われた木材利用を模索してきた。流域の諸団体で構成される「京筏組」において、地域住民とともに、流筏を中心とした「山・川・まち・ひと」の関わりを研究しながら、今ではなくなりつつあるその関わりをあらたに再構築し、流域活性化への道筋を模索している。

大西信弘・高橋藍子は、亀岡盆地において「亀岡の農業と自然」をテーマに、水田耕作と水田生態系の関わり、又は水田生態系と人の暮らしの関わりを考察している。水田生態系の生き物たちは、一昔前まで水田漁労が行われていたように、人々の生存基盤として重



保津川（桂川）流域図（河原林作成）

要な役割を果たしてきた。稲作とともにある自然やそうした自然とのつきあい方には、多面的な環境利用の知恵があり、人々の暮らしと自然が乖離せずにある様を見ることができる。水田生態系は米だけでなく他の多くの生物資源を育む生産性があることを生存基盤という観点から見つめなおす必要があるであろう。

亀岡 FS では、亀岡盆地さらには丹波地域において、自然とそのつきあい方を生存基盤として生きてきた人々の営みの「知恵」を探求している。（河原林洋）